

東北 VALUE SIGHT

山形



OSINの会 会長
渡辺 誠一 (わたなべ・せいいち)

農業後継者の育成、地域の活性化を目指して、農家が主体となり新規就農希望者を育てる大江町就農研修生受入協議会(通称OSINの会)を2013年4月に設立した。

すもも4ha、桃20a、ラ・フランス20a、水稻4.3ha、大豆1ha、りんご20a、原木椎茸、原木なめこなどを栽培。すももの新品種育成に力を入れており、サンルージュと光李(ひかり)は、市場から高評価を得て期待されている。

JAさがえ西村山・すもも部会長も務めている。

OSINの会
<http://www.osinnokai.org>

全国で農業の担い手不足が深刻化しているが、大江町には都会から農家を目指して移住する人が増えている。大江町にある「OSINの会」は、町や農協などと連携して就農希望者を受け入れ、育成している。2016年4月から女性3名を研修生として受け入れたこともあり、県内外からその取り組みに注目が集まっている。

10人の受入農家を組織化 果樹を中心とした作付けを提案

大江町就農研修生受入協議会(通称OSINの会)は、2016年4月で設立4年目を迎えた。OSINの会の名称には、ドラマ「おしん」のロケ地が大江町であることや、研修生が慣れない農作業や地域の生活に辛抱するのはもちろん、受入農家も彼らにとことん付き合い辛抱するという思いを込めている。

OSINの会が発足した経緯は、農家の高齢化や後継者不足が顕著になってきたからだ。加えて国が青年就農給付金の制度(新規就農者を対象に年間150万円を給付)を設けたことも大きい。就農に向けた研修は、通常、1人の個人農家の元で行うが、人間関係に悩み離脱してしまうケースが多い。また、他の農家との接点がほとんど無いため、経営感覚が乏しくなる欠点がある。OSINの会は、当初から10人の受入農家を組織化した。研修期間は2年間あるので、1年目と2年目は必ず異なる受入農家の元で研修し、より多くの農家、地域とのつながりを図るようにしている。

大江町は、りんご、ラ・フランス、すももなど果樹栽培が盛んである。果樹は苗木が成木になるまで時間はかかるものの、野菜より利益率が高い。新規就農者は取り組みやすい野菜を中心に作付けを考えがちだが、OSINの会では果樹を中心に野菜を組み合わせるアドバイスを心がけている。

大江町で生まれたすももの新品種 新規就農者と一緒に育て特産品へ

新規就農者が戸惑うのは、作物の選択と収益である。複数の作物の組み合わせ(ポートフォリオ)で

収益を確保していくのが、望ましい農業経営のスタイルだ。私はすももを4ha栽培しており、新品種の育成に長年取り組んでいる。赤いサンルージュは2015年比で4倍の出荷量となり、2016年から市場出荷が本格化した黄色の光李(ひかり)は、トップセールスの効果もあり、キロ単価1,000円を維持した。

これらの新品種はJAさがえ西村山すもも部会員だけしか栽培できない。他の果樹に比べて収穫までの管理が容易なので、新規就農者にとって取り組みやすい。この土地だけでしか栽培できないことが、他地域との差別化につながることで、収益を上げやすくなる。そのため、新規就農者にすももを組み入れることを薦めている。

新規就農者の強みは、農業以外の社会経験があることだ。個々が財務、マネジメント、営業など幅広いスキルを有しているケースが多い。すももの生産者が増えれば法人化も視野に入れているので、既存農家には乏しい知識や経験を彼らが補ってくれることに期待している。栽培だけでなく、経営面でも新規就農者に積極的に参加してもらい、大江町の特産品としての地位を確立していきたい。

共同作業場の完成と農機具の共有 町独自の住宅支援など充実した施策

研修生が独立するにあたり直面する問題は農地の確保だが、併せて作業場と農機具もなければ農業を開始することはできない。農地は、農業委員会や各地域の農家と緊密に連絡して独立前にもどをつける

「OSINの会」は リタイアゼロ 新規就農者支援 の仕組みづくり

ことができる。しかし、作業場と農機具をセットでそろえることは資金面でとても厳しいのが現状だ。そのなかで、2016年10月に農協の選果場だった建物を改築して共同作業場が完成した。共有する農機具は、果樹栽培に使用するスピードスプレイヤ(農薬噴霧機)2台。大江町と農協、両者の協力を得ることで実現した。現在、独立者3名が出荷作業をしているが、今後、利用者は増えていく予定である。独立後から最大5年間は、青年就農給付金を受け取ることができるので、この期間内に自分の作業場と農機具をそろえ、共同作業場は独立を控える者にバトンタッチするという循環が生まれることを願っている。

生活面では町独自の住宅支援がある。家族で移住

する新規就農者向けの住宅を2年前から毎年1棟ずつ建設している。独身者は使われなくなった大江中学校の寄宿舎に入居できる。寄宿舎の家賃・光熱費は町が全額負担しており、新規就農者向け住宅や借家の場合は、一部を町が補助している。これらの充実した施策があることで、早期に農業経営を軌道へ乗せやすくなっている。

新・農業人フェアでスカウト 家族を含めて34名が都会より移住

スカウトの場は、年4回、東京で開催される新・農業人フェアである。来訪者と同じ目線で話することができる研修生、独立者の話には説得力がある。その後、現地見学会を開催して、農作業体験や懇親会

で大江町の雰囲気を感じ取ってもらう。大江町に移住して農家を目指す決意した人は、1週間以上の短期研修を受け、お互いが合意した上でOSINの会の研修生となる。OSINの会の会計業務やホームページおよびパンフレット制作などは、研修生の前職や経験を生かして行ってもらっている。

OSINの会での研修を終えた独立者と研修生は各7名となり、家族を含めると34名が都会より大江町に移住して、農業を中心とした生活を送っている。農家を目指すという共通の目的で移住してきた仲間の存在が心の支えとなり、リタイアゼロという結果につながっている。



2016年2月の新・農業人フェア。独立者と研修生、役場職員、受入農家が一緒に来場者へ声をかけている。